巻頭言

2000年を迎えて

富士通株式会社　代表取締役社長　　秋草　直之

謹んで、新春のお慶びを申し上げます。本年が皆様にとりまして、実り多き年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。

私達は今、2000年という大きな節目を迎えるにあたり、情報改革とも言うべき大きな転換点に立っていると言えます。産業の中で知識やサービスの比重が高まり、社会の仕組み、企業のビジネス、個人のライフスタイルは大きく変わろうとしています。その変化の源の中心となるのが、インターネットです。弊社でも、「Everything on the Internet」というスローガンを掲げ、今後より一層インターネットに指向したソリューションビジネスを行っていきたいと考えています。

インターネットの世界は技術改革が急激で、１年間の変化が、それ以外の世界の７年分にも相当するというところから、「ドッグイヤー」と呼ばれています。そしてそのスピードはますます加速化しており、最近では「ドッグイヤー」という語ですら陳腐化しつつあるほどです。

企業においても、今後、事業遂行のより一層のスピード化が求められる時代になることは明確であり、情報化の更なるスピード化、そして高度化が必要となります。インターネットを単に情報収集やメールの道具としてではなく、ビジネスコラボレーションのツールとして使いこなし、「いかに高い付加価値をいかに速く創り上げることが出来るか」ということが企業の競争力になります。そのためにはより一層戦略的な情報化が重要となってくるでしょう。知識・ノウハウの企業経営への有効活用（ナレッジ・マネジメント）や、ネットワークを介したワークスタイルに適した組織の在り方、個人の成果に基づく公正な人事評価システム、グローバル化等、企業も変化していくことが必要となってきているのだと思います。もちろん、このことは企業に限ったことではありません。社会全体の情報化を推し進めるためには、まず政府の情報化を急速に進め、企業や個人の情報化を誘発していくことが必要と考えます。

このように「ドッグイヤー」の中で生きる我々ですが、一方「一年の計は元旦に有り」とも言うように、新たな時代を迎えるにあたっての「計」を立てることも必要ではないでしょうか。大きな歴史の流れを見れば、1800年前後から始まった軽工業中心の「第一次産業革命」、1900年前後からの重工業への転換（いわゆる「第二次産業革命」）というように、社会は百年の単位で変化してきました。社会や経済の構造あるいは人の価値観、教育の在り方など社会全体が変わるためには数十年から百年の時間を要するということでしょう。「百年の計」は無理だとしても、せめて「十年の計」として将来のネットワーク社会を中長期的な視点で見据え、そのためのインフラやプラットフォームあるいは利用環境についての整備を官民が協力して進めていくことが必要ではないでしょうか。インフラやプラットフォームについては、技術の進展により高速化・低廉化・高度化に向けた様々なアプローチが提供されようとしています。また利用環境については電子商取引に関する国際的な検討に代表されるように法制度等のハーモナイゼーションの議論が各方面で展開されています。こうした多様な選択肢の中で、言い換えれば激しい変化の中で、その選択を見誤らないためにも社会全体が向かおうとする未来について、広く共通の「計」を持つことが求められます。「社会、企業、家庭と個人を繋ぐ、豊かなネットワーク社会の形成」を目指して、2000年はそういうことを考える年にもしたいと思っています。